



2023 年

7 月 第 3・5 週 の 主 日 礼 拝 説 教 要 約

・ 7 月 1 6 日 : マタイ福音書 6 : 2 5 - 3 4 .

『 煩 悩 』

・ 7 月 3 0 日 : マタイ福音書 7 : 7 - 1 2 .

『 実践倫理 』

(7 月 2 3 日 の 要 約 は 、 代 務 者 日 の た め あ り ま せ ん 。)

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

自分の命のことで何を食べようか、何を飲もうかと、また体のことで何を着ようかと思ひ煩うな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。 (マタイ福音書 6:25)

あなたがたの天の父は、これらのものがみな、あなたがたに必要なことをご存じである。まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすればこれらのものはみな添えて(加えて)与えられる。(同 6:33)

イエスの説教を聞くために“山上”まで追隨した人々に向かって、あなたがたは「思ひ煩うな」と説くのは誰あろう、必要な物資の“供給源”である神の、その独り子です。天地の造り主(ご自身)が被造物を養うのはごく自然なことであり、当然のことであると。

創世記の第1章で、アダムとイブは“勞せずして”飲食にありつけました。しかし、神からそこを追ひ出される段になると、それ以降、彼らは自分で努力をして“額に汗して”衣食住を獲得することを命じられます。

今、イエスの眼前にいる人々はその(失樂園の)時からずっと、自力で人生を、日常生活をやりくりしてきた(と信じた)人々の子孫です。けれどもイエスはその人々に対して“信仰の稀薄な者達”と呼び掛けています。さらに、不足を補うためには、「神の国と神の義とを求めよ」と勧めているのです。一体どういうことでしょう。

使徒パウロは第2テサロニケ書の3章で、“働かざる者、食うべからず”という、人類史上の有名な警告を発しています。それはアダムとイブの子孫の人間であるかぎり当然のこととして。神の国と神の義とを求めるまでもなく、働かない者は“食うべからず”と。後代の一部の宗教改革者の意見とも同じです。さらに、この使徒の警告は、「主イエス・キリストにあって命じ勧め(同3章12節)」しているのだと。

キリストがいつどこでそうおっしゃったのかは定かではありませんが、イエスの山上の説教とは、あきらかに主張が食い違ふのです。どこか“異教の”響きさえ感じられるのが使徒のこの書簡に綴られた言葉です。

一方、イエスは別の所でこんなことを語っています。

朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもとどまって永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子（イエス・キリスト）があなたがたに与える食べ物である。（ヨハネ福音書 6：27）

思い煩う人間にとっては、この上なく有難いメッセージです。造り主は被造物が飢えることをけっして望んではいないのです。これは間違いなく“神の義”の中に含まれています。人間を“永遠の命に至らせること”が神の究極の目的だからです。ただ、ここでイエスは今度は“働きなさい”と語りかけています。しかし、働くことにより今生の飢えを満たすのではなく、永遠の命を得るためにこそ、働くのです。使徒にはけっして言えない言葉です。もちろんこの労働は、神の同労者となることを意味します。そうなったときに人間は、もう思い煩うことはなくなっているのです。

《 実践倫理 》

本日の聖書箇所最後の言葉（7：7）は、いわゆる黄金律と呼ばれるものです。これによく似たものが福音書よりも500年ほど前の文書である中国の論語に記された孔子の警句にあります。「己の欲せざるところは人に施すことなかれ」という言葉です。さらに古くからあるものとして、プログラム下に引用したのが「ソロモンの箴言」にある言葉です。

あなたを憎む者が飢えているならパンを食べさせ、渴いているなら水を飲ませよ。こうしてあなたは彼の頭に炭火を積み、主はあなたに報いてくださる。（箴言 25：21）

孔子もソロモンもキリストとは異なる純然たる“人間”です。彼らの言説もまた、時代をさかのぼれば別の誰かが発していた言葉であった可能性は否めません。一方、今日の福音書のキリストの言葉は、これとは似て異なる言葉です。そこにネガティブな要素は全くありません。この言葉をギ

リシャ語原文から直訳すると、「人々にしてほしいと思うことは、何でも人々に対しそうしなさい」となります。こちらは“施すなかれ”でもなければ、行為の結果として“報われる”ためでもありません。キリストはこれこそが“律法と預言者”であると。つまり神の理想形なのだと。それが神の御旨の実践であるのなら、同時に“愛の実践”でもあるはずです。

ただ人間は神ではありません。他者に対し無尽蔵の愛を注ぐことはもとより不可能です。神の力を借りることを厭わないことも大切です。では、そのためにどうすれば良いのでしょうか。

求めなさい。そうすれば与えられる。探しなさい。そうすれば見つかる。叩きなさい、そうすれば開かれる。誰でも、求めるものは受け、探す者は見つけ、叩く者には開かれる。(マタイ福音書7:7-8)

愛の実践のためには“神からの供給”も欠かせません。神の愛の業は神と人との分業によってこそ成し遂げられることが、神からの申し出として、上記の如く黄金律の直前に告げられているのです。空腹の子供に石を与える親がいないのも、造り主である神と被造物である人間との関係が、人間の親子関係にそのまま移譲されているからなのかもしれません。

さて、“黄金律”は山上の説教の最終章に出てくる言葉ですが、次の8章の始まりに、「イエスが山から下りられると、大勢の群衆が付いて来た」とあることから、彼らがイエスの歴史的説教を耳にした無名の聴衆であったことは間違いありません。イエスの聴衆とは、何か自分の人生に問題を抱えていたり、また多くの場合が「空腹」という抜き差しならない状況に陥っていた人々でした。彼らの空腹を満たす時には、イエスは聴衆に、彼らの所持する僅かばかりの食物の提供を呼びかけ、祈りをささげ、これをもとに5千人もの人々の空腹を満たしたことがありました。

西暦909年に創設されたブルゴーニュのクリュニー修道院では貧者の救済のための給食が施され、時には1日に5千人をはるかに上回る給食が提供されたこともあったそうです。神と人との分業のなせる業でした。